

未来をつくる、飛島の今。



Supported by 庄内広域行政組合

酒田港から定期船に揺られて1時間15分。

日本海の只中に、山形県で唯一の離島、飛島はあります。
この島では今、島民とNPO、大学、行政などがひとつになって、
活気ある未来をつくる取り組みが次々と生み出されています。



東北公益文科大学 教授

吳尚浩さん
Go Naohiro

平成13年より、飛島の地域づくりに関わる。「昨年は10年に一度の『離島振興計画』策定の年。未来協議会が中心になって、島民の案をまとめました。そこで出したアイデアを今後の島づくりにいかしていきたいと思っています」。



飛島コミュニティ振興会会長
佐藤勝一さん
Sato Katsuichi

中学卒業で漁師になり、北洋サケマス漁の漁撈長として30年間以上活躍した。「自分が初めて漁撈長になった時、飛島の人たちに助けてもらつた。今は自分の仕事を犠牲にしても島に恩を返したい」。

「外からの視点」が見つけた
島の、希望ある未来

島が抱える課題の解決に
地域のNPO、大学が
立ち上がった10年

目の前には青々とした日本海と、水上に浮かび上がる鳥海山。空にはウミネコが舞い、地上にはスルメイカやトビウオが天日干しにされている。飛島には海水浴を楽しむ家族連れのほか、釣りやバードウォッチングに訪れる人も多く、豊かな自然とゆつたりとした島時間が多くの旅人を魅了してきた。

しかし実際に住むとなると楽しいことばかりではない。基幹産業の漁業は収入が不安定で、常駐の医師もいない。島を離れる人も多く、ピーク時の昭和15年には1788人だった人口が、今では241人(※)。島民の平均年齢は68歳で少子高齢化が進んでいる。

東北公益文科大学が開学した平成13年、呉尚浩教授は夏の合宿で、初めて飛島を訪れた。そして島の自然や島民の暮らしの豊かさに感動したのと同時に、海岸に堆積する膨大な漂着ごみと、過疎高齢化の厳しい現実に直面した。「漂着ごみは私たちの生活が生み出したもの。自分たちの手で何とかしたもの。いという気持ちが湧いてきました」。

島の漂着ごみを回収する「飛島クリーンアップ作戦」が始まった。2年目からはNPO、大学、行政、海上保安部などによる実行委員会形式となり、NPO法人パートナー・シップオフィスなどが事務局となつて、毎年多くの参加者が渡島し、開催されている。こうして新たな訪問者を迎えたことで、島に変化が現れ始めた。

関係者が一堂に会する
「とびしま未来協議会」。
島に未来を語る場が誕生した

折しも同年、県と市が主催し、飛島の漂着ごみを回収する「飛島クリーンアップ作戦」が始まった。2年目からはNPO、大学、行政、海上保安部などによる実行委員会形式となり、NPO法人パートナー・シップオフィスなどが事務局となつて、毎年多くの参加者が渡島し、開催されている。こうして新たな訪問者を迎えたことで、島に変化が現れ始めた。

島の漂着ごみを回収する「飛島クリーンアップ作戦」が始まった。2年目からはNPO、大学、行政、海上保安部などによる実行委員会形式となり、NPO法人パートナー・シップオフィスなどが事務局となつて、毎年多くの参加者が渡島し、開催されている。こうして新たな訪問者を迎えたことで、島に変化が現れ始めた。

